

貼られた付箋

あの日少年は付箋を貼られた。

少年の生活には常に4という数字がまわりついていた

脳裏から4が離れることはなく どうしても数を数えてしまう

頭上の電線にいる鳥の数 黒板の文字の数 エレベーターに乗っている秒数

カウントは1から始まり 4という数字を通るたびに

不安と恐れが少年の胃の底をねじれさせていた

鳥を蹴り散らし ノートには絵を描き 声を出してエレベーターに乗った

数えることから来る恐怖は 苛立ちや誤魔化しで抑えるしかなかったのだ

ある日少年は病名という付箋を貼られた。

その付箋は少年に安心と平穏を与えた

自分はおかしくない 病気という理由があったのだと

周りとは違うことに気づいていた少年は 自分の異常さを説明できる理由が欲しかったのだ

少年には正しい事実である病名という付箋が貼られた。

それは彼にとって貼られて良かった付箋なのだろうか。

少年はその付箋に自分を説明されて良かったのだろうか。

あの日少女は付箋を貼られた。

少女は人とは違う世界が見えていると信じていた

頭の中で文字たちには 色があり 性格があり 感情があった

「さ」は青を荒削りした水色で 眼鏡をかけた少し厳しめの先生のように見えていた

「い」は薄い水色とミント色で 穏やかな優しい精霊が微笑んでいるように見えていた

少女は自分にだけある特別なことを誇らしく思っていた

他の人には文字がただの黒白にしか見えないことを可哀想とさえ思っていた

その特別は自分だけのもの その特別に浸っていたかった

ある日少女は現象という付箋を貼られた。

その付箋は少女に衝撃を与え、未来を奪った

少女の特別は一般的な現象という名前で片付けられ 特異ではあるが普通という烙印を押された

自分だけの特別に縋っていた少女は 自分の価値は説明できないものであって欲しかったのだ

少女には正しい事実である現象という付箋が貼られた。

それは彼女にとって貼られて良かった付箋なのだろうか。

少女はその付箋に自分を説明されて良かったのだろうか。

あの日私は付箋を貼った。

私は気配に敏感で 見てはいけないものを見つけてしまう性格をしていた

自分の鋭い洞察力を自慢に思い その見つけた秘密を戦利品のように掲げていたのだ

私には親友がいた 穏やかで優しく 綻ぶように笑う子だった

しかしその裏には普通とは異なる家庭環境があった

そして私はその触れてはいけない部分を見つけてしまう子だった

きっかけは些細なことだった その子の母親がある人と一緒にいるところを見てしまっただけ

私はそのとれたてのまだ生々しい温度の残る戦利品を掲げて街中を走ったのだ

その日私は誹謗という付箋をその子に貼った。

その付箋は彼女から希望と人への信頼を奪った

貼られた付箋によって周りからの視線は変わり あの母親の娘というレッテルを擦り付けられた

付箋は貼って剥がせるものなはずだった

けれど彼女に貼られた付箋は剥がせず 破けず 一生消えなかった

私は正しい事実であるが貼ってはいけない誹謗という付箋を彼女に貼った。

それは私にとって貼って良かった付箋なのだろうか。

それは彼女をどれほど苦しめたのだろうか。

その付箋を剥がそうとした彼女の爪はどれほど赤くなったのだろうか。

そして私はその一枚の一生剥がすこのできない付箋の罪に気づいているのだろうか。